

イエメン現代史

－その４－

1911年イマーム・ヤヒヤーとオスマーン帝国との間でダッアーン和平協定が締結したが、イマームは第1次世界大戦後に締結されたムードロス休戦協定が効力を発し、トルコがイエメンから完全に撤退した1919年になるまでサヌアーに入城しなかった。

第1次世界大戦の初期にトルコ軍はアデンにいたイギリス軍を攻略するために、サイード・パシャ陸軍少将をラヘジュへ向けて派遣する。しかしラヘジュのスルターンであったアリー・ブン・ムフセン・アルアブダリーは自分の領地を攻略軍に解放しなかった。これは当時イギリスがアデン並びに南部諸州のアミールやスルターンに対して約束していた保護協定を考慮してのことであった。

この時イマーム・ヤヒヤーは情動的にトルコ側に味方し、ラヘジュのスルターンに書簡等を送るのであるが、公式には第1次世界大戦の情勢を鑑みて中立を保っていた。

トルコのラヘジュ攻略部隊は7軍団に分かれ、その兵数はアラブ人等を含み8,000人に上った。トルコ軍は軍事資金に苦しみながらも、1914年にラヘジュの首都のアルハウタ市を占領することに成功した。

スルターンのムフセン・アルアブダリーは夜明けにアデンに向け首都を脱出したが、途中敵と間違えられインド人部隊に急襲され、翌日絶命する。彼の一族は占領後アデン等に分散し難を逃れたが、サイード・パシャ將軍は3年間ラヘジュを占領し、再びラヘジュに一族が帰還するのは、第一次世界大戦の終結を待たねばならなかった。

トルコと連合国との間のムードロス休戦協定発行後1918年、イギリスのアデン総督のシュワートに対して、サイード・パシャ將軍は自らの身柄と軍隊及び装備等を引き渡し、そしてホダイダから故国へ汽船で向かうためにラヘジュを去って行った。

イマーム・ヤヒヤーは、サイード・パシャ將軍からラヘジュの引き取りの打診があった際、イギリスの軍事力を警戒して、中立的立場を維持していたが、イギリスは彼の態度に満足せず、トルコ軍の撤退が遅れていることを理由に紅海岸のホダイダ等の港湾都市を砲撃し、これを占拠してしまった。

そして当時イギリスの同盟者であったアリー・アルイドリーシに引き渡してしまい、イマームの影響下にこれらの港湾都市が入るのは、アルイドリーシーの死まで待たなければならなかった。

ーラヘジュ侵攻の問題点の要約ー

ラヘジュ侵攻の問題点とその性格及び具体的状況に関して研究者達は以下の様に要点を整理している。

アリー・サイド・パシャ少将の指揮下、ラヘジュに侵攻した際、トルコ政府からの命令事項に基づいてトルコ軍が実行した内容は次の通りである。

1：まずアデン防衛に従事していた英軍の分散化を達成したこと。ドイツ・オーストリア枢軸国側に付いたオスマーン・トルコ軍が、イギリスを初めとする連合国側に対し、軍事行動を起こした諸地域に逗留するイギリス人の防衛力の弱体化を計った。

ところで、これ等の拠点の一つはエジプトであるが、アハマド・ジャマール・パシャによるエジプト攻撃への対抗阻止を狙って、英軍はインドに駐留する自国の軍隊の一部を、スエズに派遣するものとトルコ側は読んでいた。一方イギリスはオスマーン・トルコ軍が（イエメン）南部方面及びアデンに対し進軍計画を立てていることを察知していた（注17）。そこでイギリスは紅海をスエズに向かう途中の海軍3個大隊を、必要な事態に備えてアデン防衛のため（アデン沖に）待機させることになった。

（注17）：「イエメンにおけるオスマーン支配」Dr. フェールーク・オスマーン・イバーザ著 P. 272が出自であるが「時の贈り物」アハマド・ブン・ファドル・アルアブダリー著P. 210に依拠している。

次にイエメン北部に駐留するトルコの攻撃部隊の支出を、ラヘジュの潤沢な富と収益によって補填することを保証させようとするものであった。（だが現実には）『ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物』の著者である歴史家アハマド・ブン・ファドル・アルアブダリー氏の分析によれば、ラヘジュはイエメン北部駐留のトルコ軍の影響力が及んでいなかった。

そこでサイド・パシャ司令官が公表した作戦内容は、アデン制圧とアデンからの英軍の排除を狙ったトルコ軍の侵攻であった。ラヘジュのスルターンとの戦闘はアデンに至る道中を確保するためのものであり、トルコ側にとっては副次的な目的の様であり、トルコ側が提示した目的はイップ、タイズ、アルハジャリーヤ、カアタバ、リダーウ等のオスマーン・トルコの影響下にあった諸地域の部族中で、ラヘジュへの侵攻にサイド・パシャ司令官とかつて協力したことのあるイエメン諸部族を誘い込むことにあった様だ。というのは彼、即ち前述のトルコの将軍は、アデンの要塞化の程度と海軍が支援しない歩兵と砲兵力でアデンを制圧することの難しさを良く知っていたからであった。

また一方で、サイド少将によるイエメン南部前線への転進は、アシール地方に面した紅海北部沿岸にいたイギリスの艦船による艦砲射撃から遠ざかるものであった。（この出来事

は反トルコにおける英国の同盟者であり、アシール地方の統治者であるムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーを援助する名目で、ルハイヤの港において英国軍がトルコに対して砲撃を行った後の事であった）（注18）。

（注18）：「イエメンにおけるオスマーン支配」Dr. ファールーク・オスマーン・イバーザ著 が出自であるが「現代イエメンの構図」アッサイー・ムスタファー・サーリム著 P.201に依拠している。

2：前述の様にオスマーン・トルコの権力に服従していた地域のイエメンサイドが侵略を遂行したことは、オスマーン帝国の圧力を要因としながらも、アデンにおけるイギリス人達との戦いと彼等の追放という宗教的義務を動機としていたのであった。

この事はトルコ側がその侵略に対して提示し、イエメン側が信じた正当性である。そしてこれはトルコ側の書簡、2つの代表団、イマーム・ヤヒヤーの代表団等が、イエメン総督マフムード・ナディームがラヘジュのスルターンに宛てて送ったものであるが、この事はイギリスに対抗してトルコ側に付くことと彼の領土にアデンへの軍事進行のための道を確保することを求めてのことであった。

3：アルハワーシブのスルターンとダーリアの大守がラヘジュ侵略に参加したことは止むを得ないことだった。その理由はイギリスがスルターン諸国や南部首長国との間で結んだ保護協定に基づくそれ等諸国の保護、防衛を怠ったことにある。ハワーシブ・スルターン国とダーリア首長国は侵略軍にとって北から南（本質的にはラヘジュ・スルターン国）への通過点にあり窓口でもあったのだ。

4：イギリス人達がイエメン南部のスルターン諸国及び首長諸国の保護停止措置を行ったこと。特に以上の領土中には先ず初めに（トルコの）攻撃目標となるスルターン国としてラヘジュが存在していた。従ってイギリス人達は自国と南部のスルターン国及び首長国との間で交わされた保護協定に違反したことになる。

上記のことはラヘジュ及びシェイフ・オスマーン地域に対する（トルコからの）攻撃を受ける要因となり、その後サイド・パシャ総督の支配を導く侵略を成功させるはめとなったのである。シェイフ・オスマーン地域を侵略者達の手から奪回した様に、イギリス人達はそのつもりがあれば、南部のスルターン国及び首長国の保護は出来た筈である。というのは、イギリス人達はそれ等の地域をアデン防衛のための前線と見做していたからである。だが事態は南部スルターン国及び首長国の保護停止という結果に終わってしまった。

5：そして南部スルターン国及び首長国の侵略に対抗する、という動きも停止してしまったことが挙げられる。というのは、イギリス人達は最も困難な状況、即ち北部のトルコ・イエメンの大部隊に対峙させられる状況に彼等を置き去りにしたからであった。アルファドリーのスルターンはイギリス人達が彼に対して軍事物資や武器等を引き渡さないことに絶望

して、アデンからラヘジュへと戻り、トルコ人達に味方することを宣言した（注19）。また同様にファドル・ブン・アブドゥラー・アルアクラビーは（注20）、アルアクラビーと言うマシュヤハ（シェイフが行政を司る行政区）の長であったが、彼はトルコ人達の侵略から彼の領地の安全を求めることを強いられ、サイド・パシャ将軍は彼のマシュヤハの拠点にあるベエル・アハマドの城塞にオスマーン・トルコ帝国の旗を掲揚する見返りに、彼に安全を保証するという約束をすることで合意し、英国のインド騎馬隊がその旗を確認するまでの数日間その旗は、はためくことになる。

彼等は直ぐ様それを引きずり降ろし、スルターンをアデン総督の元に連行した。そこで叱責し、二度と旗を掲揚しないことを約束させた後、彼を釈放した。トルコ人達がこの事を知った時に彼を逮捕し、一時的に投獄し、後に解放している。

（注19）：「イエメンにおけるオスマーン支配」 Dr. ファールーク・オスマーン・イバーザ 著 P. 289

（注20）：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」アハマド・ブン・ファドル・ムフセン・アルアブダリー 著 P. 228

6：ラヘジュのスルターンであるアリー・ブン・アハマド・ブン・アリー・ブン・ムフセン・アルアブダリーは、スルターン国と英国間で締結された保護協定を固守し、トルコに与しなかった。のみならず彼の国からアデンへの道を侵略軍のために開けなかった。事態は、彼の国を通過する事が、侵略の目的になってしまった。

この様な証拠が証明している様に、恐らくそれが主たる目的であった。そしてそれは英国人達が保護協定を尊重も保持もせず、協定に関して彼等の義務を遂行していない時のことであった。

ロンドン発1917年7月25日、26日付けのデイリー・タイムズ紙は「防衛されていない保護地」というタイトルの記事を掲載し、その中で前述の侵略に対して何もしなかったアデンの態度を批判している。その記事にはデイリー・タイムズ紙が掲載した世論が述べられているが、「実にアデンの港町はインドやオーストラリアへの主要な海路として存在している重要な港町であるが、陸路に関しては2年前からトルコにより包囲されている」。

また付け加えて次の様に述べている「アデンの近くでの軍事行動の話は、英軍に名誉や栄誉を獲得させたと言わしめることは不可能なことであり、その反対である。のみならず我々は我々が住んでいる皆へと追いやられてしまったのである。敵に対してその地を動き回っている弱い軍隊を放置したままにして、アデンにいる英軍の保護の約束を享受している部族の間において、彼等を保護出来ないという理由があるからといって、彼等に何を望めるのであろうか、等々」（注21）。

（注21）：「イエメンにおけるオスマーン支配」 Dr. ファールーク・オスマーン・イバーザ 著

7：イマーム・ヤヒヤーの義務に関しては、アデン侵攻に対して中立の立場をとることであった。たとえ彼が最初のうち、またはその準備段階で、侵攻の動きに愛着を持って便宜を図ったり、或いはラヘジュを支配するスルターンと書簡を取り交わしたり、彼の代理人であるムハンマド・アリー・アッシャリーフを派遣してトルコ側との連合や、イギリスへのスルターンの友好を放棄する様に呼び掛けたとしても、彼の意見によると、彼とイギリス人達との間の関係の将来を切望するが故に、アデン侵攻には参加しなかったのである。

8：イマーム・ヤヒヤーはサイド・パシャ將軍の呼び掛けに呼応して、ラヘジュと南部諸地域を引き取ることを怯んでいた。もしトルコのサイド・パシャ將軍がラヘジュを征服した直後、またドイツとその同盟国のトルコとオーストリアがまだ陥落する前に、イマームにそれを呼び掛けたことが歴史的に確証されていれば、イマーム・ヤヒヤーにはそれが出来た筈である。

そしてもし彼がイギリスの影響から南部を解放して、本来のイエメンにおける再統一の為に積極的に一步をしるしていたとしたら、イマームはラヘジュを引き取っていたであろう。しかしながら次の様に推測されるのであるが、イマームは呼び掛けに、その歴史的記述は教えてはいないのだが、呼応せず逃げ口上を作った。というのもイマーム・ヤヒヤーは当時、依然としてシャハーラに居て、未だにトルコからサヌアーを受け取っていなかったからである。また北部での彼を取り巻く状況（注22）は、その様な試みに立ち上がることを可能にする程には安定していなかったからである。

（注22）：「イエメンにおけるオスマーン支配」 Dr. ファールーク・オスマーン・イバーザ著
P. 402

同様に彼は自分の国が独立を獲得しようとしている時に、イギリス人達を刺激して彼に敵対させる事を望まなかったのである。彼は（独立という）事態が上手く準備出来るまで、事態が平和裡に進展することをより望んでいた。特にイドリース家の者がアシール地方にいて（イマームの自滅を）寝て待っていた。そしてティハーマ地方を支配しようと試みていた。（イドリース家の者はそれをイギリス人達の支援で手に入れた。そしてイギリス人達からホダイダやその他ティハーマ地域の港や町を得ていた）。

イマーム・ヤヒヤーが初めてそれ等の地域を支配したのは、後で我々が知る様に、ヒジュラ暦1343年（西暦1924年）になってからである。しかしながら（注23）歴史的に確定したことは、サイド・パシャ將軍がイマーム・ヤヒヤーに対して、ラヘジュやその他の南部の地域を受け取るために軍隊を派遣する様に求めなかったことである。と言うのは彼、即ちトルコの將軍は、ラヘジュ侵攻に関するイマーム・ヤヒヤーの中立に対して満足しな

ったからであり、彼は事態に関心を払う者に対してラヘジュ引渡の準備が整っていることを示唆するだけで充分だったからである。

(注23)：「イエメンにおけるオスマーン支配」 Dr. ファールーク・オスマーン・イバーザ著
P. 402

—第2次オスマーン統治からの独立後のイエメン—

第1次世界大戦中、また大戦直後のオスマーン帝国とイマーム・ヤヒヤーとの関係は良好であった(注1)。それはイマームが戦争に対して中立の立場をとり、連合国に加盟せずに、ダッアーン条約の名で知られる彼とオスマーン帝国との間で完成をみた平和協定の責任を果たしたからであった。

(注1)：「イエメン歴史精選」 アルジャラーフィー著 P. 225

またイマームは戦争の間、財政面からもオスマーン帝国を支援し、前述の条約で規定されている財政的義務行為を彼に対してオスマーン帝国がなさなかった事も知らぬ振りをしていたのである。そこでサヌアーのトルコ総督マフムード・ナディーム・ベクとオスマーン軍のアハマド・タウフィーク・ベク將軍は、イマーム・ヤヒヤーに対して、1918年10月30日、イギリス軍とオスマーン帝国との休戦直後にサヌアーに入城し、当時ゴムダーン城として知られていたカスル・アッシラーハ(武器城)の中にあつた武器や弾薬の類全てを、イマームに対して、オスマーン帝国が抱えていた借金や債務の代わりとして受け取ることを提案した。

それはイマーム・ヤヒヤーをイエメン統治におけるオスマーン帝国の相続人と考慮してのことであつた。ナディーム・ベク將軍は前述のイギリスとトルコが休戦したことを通知した1918年11月5日付けのアデン総督からの手紙に対する11月16日の返書の中で、オスマーン帝国最高会議からその件に関する指導書が到着した後でなければ、彼及びトルコ人達のイエメンからの移動は出来ないことをアデン総督に詫びている。そして休戦条件の履行はイマーム・ヤヒヤーの手にある、と強調した。

マフムード・ナディーム総督の、イマーム・ヤヒヤーに対する立場は、この目的のみに限定されていたものではなかつた。のみならず彼はマシュヤハや部族の長達に対しイマーム・ヤヒヤーの周囲に集まる様に、影響を及ぼすことに努めた。それは取り分け低地部のマシュヤハに対しての事であつたが、これは南部での戦いでイマーム・ヤヒヤーの支援が得られなかつた事に満足していないラヘジュ侵略軍団長サイド・パシャが、彼等に影響を及ぼすこと、或いはイギリスがアデン総督を通して、南部保護領に加盟する様に彼等に影響を及ぼすことを、マフムード・ナディームが恐れたためであつた。

もしこの様な恐れがあつたとしても、イマームにはどうしようもなかつたのであつた。何

故なら彼は、我々が見てきた様に、イエメンの低地部の諸部族や大きな一族が南部に加盟し、植民地政策の方舟の中で歩むとは考えていなかったからである。と言うのはそれ等の部族は、サイド・パシャの軍隊を含んでいたのであるが、植民地政策の方舟と戦ったのである。

しかしながらマフムード・ナディーム総督が、アルカマーイラ（マーウィヤ行政区）のシェイフであるムハンマド・ナーシル・ムクビル・アッサラーリーに宛てた通信、それはイマーム・ヤヒヤーと友好関係を結ぶ様呼び掛けたものであるが、その中で彼の危惧を表している。

マフムード・ナディーム総督のシェイフ・ムハンマド・ナーシル宛の書簡に依ると彼の言葉はこうである（注2）。「悪しき者達の言葉に耳を傾けるのは気を付けるが良い。貴方達は15年来の私の貴方達に対する愛情の度合いを知っているのであるから。イマーム閣下は我々と共に資金と魂を持ち、立ち上がっていらっしゃる。貴方達が今在るところのものより、より高いところへ引き上げようとされて。その地区の長官（タイズ州の長官、アブドゥル・ラハマーン・ブン・アリー・アルハッダード）が近い内に貴方達の元に行き、詳細を理解させるであろう。

トルコの官吏達やそれ以外の者の言う事を聞くのは今後注意するが良い。もし如何なる形態であっても、モールス電信をもって、我々に許しを請いもしないトルコの官吏達の貴方達に宛てた通知があったとしても、それに依拠してはならない。これは我々から貴方達的手中に留めおかれるべき証明書であり貴方達に確認をとるものである。貴方達が永遠であらんことを」

（注2）：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」ハマド・ブン・ファドル・ムフセン・アルアブダリー P.257、（第1刷）

アルカマーイラのシェイフとパシャ（総督）との絆は堅いものであった。シェイフの手元には、かつてイマーム・ヤヒヤーが引き取り時に有効利用したトルコ側の軍需物資、武器、弾薬が残されていた。

サヌアーに本拠地を移動する提案に対してイマーム・ヤヒヤーは、早くも1918年、ヒジュラ暦1337年11月にはサヌアーに入城し（トルコ側に貸与していた）資金や債権の見返りに、トルコが所有していた軍需物資、大砲、銃火器、弾薬の悉く手中に収めることとなった（注3）。

（注3）：「イエメン歴史精選」アルジャラーフィー著 P.226

イギリス軍について言えば（注4）、彼等はホダイダやサリーフやモカの様なティハーマの港を攻撃し、それらの港湾やティハーマの諸都市を占拠した。この事は3年にもわたったのだが、既に我々が見てきた様に、ムードロス条約に基づいて、トルコ軍のイエメンからの撤

退が遅れていた事とサイド・パシャと彼の軍隊（凡そ兵士数1000人）が合流することが遅延している事等を論拠にしたものだった。

（注4）：「イエメン史における悲惨と貧困の調査」 アブドルワーシー・アルワーシー著 P. 332（第2刷）

アルワーシー博士は彼の歴史書の中で、イギリスの艦隊がホダイダの町を砲撃によって攻撃し、占領した出来事を次の様に描写している。「1918年、ヒジュラ暦1337年、イギリス人達はホダイダを11艇の艦隊で、日が昇るなり突然戦宣告も無しに、しかも備えに付く間も無く襲撃した。町を大砲により攻撃し、破壊した。多くの財産は消滅し、彼の地の住民達は悲惨な状態でアッタハーイムに逃げ出した。彼等は何一つ持たず、各々が自分だけを助けるのに精一杯であった」。

アッライハーニーは語っている（注5）。「ホダイダは海側から2回の攻撃を受けた。1回目は1912年、トルコとイギリスの戦争中のことで、2回目は1918年第1次世界大戦の時である」。

（注5）：「アラブの諸王達」 第1巻 P.234、第3刷

イマーム・ヤヒヤーはイギリス人がホダイダの港やティハーマの港や町の幾つかを何の権利もなくムハンマド・アルイドリーシーに引き渡してしまった事に抗議して、南部を攻撃し、軍隊をダーリウに侵攻させ、アッシュアイブ、アルアジュウド、アルカティープに彼の権力を浸透させていた。アルイドリーシーの没後、イマーム・ヤヒヤーはティハーマの港や町の返還を要求した。この時イマーム・ヤヒヤーとアルイドリーシーの間で起きた事件については、それに関する章で詳しく我々は知ることになるであろう。

在イエメンのオスマーン・トルコの総督に関しては、イマーム・ヤヒヤーがサヌアーに入城した後、イマームの政府の元で、その数900人にも及ぶオスマーン・トルコ人と様々な人種から成る行政官吏の内の幾人かが、サヌアーに留まることを選んだ。（注6）

（注6）：「イエメン歴史精選」 アルジャラーフィー P. 225

イマーム・ヤヒヤーは彼等に給与と年金を与え、彼等の内から何人かを政府の要職に就け、自らの新政権に彼等の経験を役立てることを求めた。その中には、総督のマフムード・ナディームやムハンマド・ラーギブやその他の者達がいた。

1919年の初頭に全トルコ軍のイエメン撤退は完了した。（注7）その事でイエメンは独立を手にした。1923年7月24日、トルコと連合国の間で未解決の儘であった問題の解決のために、スイスのローザンヌで開催された和平会議の第2回目の会期中に、イエメン独立は国際的に承認され、1924年8月6日にローザンヌ条約は効力を発し、こうして2度目で最後のイエ

メンにおけるトルコの支配は終焉を告げた。

(注7)：「イエメンにおけるオスマーン支配」Dr.ファールーク・オスマーン・イバーザ著
P. 413

しかしイエメン国民の進歩向上や公的利益にプラスとなり、近代文明の傘下に国民を参加させるための独立が生み出す実りを収穫したイマーム・ヤヒヤーの下で、イエメンは独立国家として自らの時代を始めたのであった。

—イエメンにおける第2回目のオスマーン帝国支配に関する概観—

我々にとって、早急に以下の事を考察することは特筆に値する。即ちイエメンにおける第2回目であり、且つ最後のトルコ支配の時代におけるイエメンの状況についてである。そして次の事は真実であり、また全ての確信を持って言えるのであるが、トルコの支配時に彼等が残した痕跡については、イエメンにおいては幾つかの病院や学校を除いて、トルコによる改革であると言及される物は残されなかった。またこの事の詳細は後で述べる事となる。

もしトルコの支配が安定しない地域に関して、彼等が口実を設けているとしたら、それはイマームが影響を持っていた地域であろう。だが彼等は自らの支配地域に関しては、口実を設けることも出来ない。その地域は行政的に分割されていたが、イップを含んだタイズ州、ホダイダ州、ラダーア州、アシル州とその他の諸州であった。これらの地域は、農作物や鉱物や労働力と言う富が満ち溢れていたが、彼等は自分達の為に活用したサリーフの岩塩鉱山を除いてはそれらの富を活用しなかった。

産業に関しては、トルコ人達はサヌアーに軽工業のための工業学校を一つしかイエメンに導入しなかった。そしてイマーム・ヤヒヤーの時代が到来した時に、彼はこの学校からイエメンにおける軽工業発展の種子を採用することもなかった。そしてこの学校は全くその存在を消してしまったのである。

また同様にイエメンに居たトルコ人達は、イエメンと言うのが第一級の農業国であるのにもかかわらず、また彼等が苦しんでいた財政難やトルコ軍の穀物不足にもかかわらず、彼等にとって支配が安定した地域において、特にタイズやイップやティハーマやラダーア諸州等において、農業の発展の為に、ほんの少しの物以外、最新鋭の機器を導入しなかったし、我々が彼等の統治に関する章の中で見て来た様に、彼等は農業の専門家達すらも招聘しなかった。

旅行家のナシード・ムアイヤド・アルアザムはイエメンにおけるオスマーン帝国の統治の情勢を描写してこう言っている(注8)。「古くからイエメン人と言うのは、誠実で活動的な民である。今日我々が、他の民族よりも彼等が遅れていると見做すならば、それはイエメンの諸事を軽視したオスマーン帝国に責任を帰すべきである。帝国は同様にアラブのイエメ

ン以外の諸州も軽視していたのであるが、特にイエメンを取るに足らない植民地であると見做しており、その民を悪しき待遇で取り扱った。

そして帝国にとっては、税を徴収し、それを帝国の首都に送って、皇帝とその高官達の腹を満足させること以外に関心がなかったのである。もし或る者がイエメンを隈なく歩き回ったとしても、文明化の痕跡の中に、オスマーン帝国の残した痕跡を見ることはないであろう。城塞、砦、幾つかの軍事病院、電線そして1つか2つの工業学校を例外として。更にトルコの高官がイエメンに派遣したのは、文官にしても軍官にしても、怒りを買う様な学問的にも資格的にも人格的にも評価の出来ない人物ばかりであった。これらの官吏達は自分自身の職権を乱用し、道義的罪や宗教的禁止事項を犯し、贈り物や賄賂を貪った。この事はイエメン人達の心を刺激し、彼等をして常にオスマーン政府と戦わせる事になったのである」。

(注8)：「幸福のアラビア国の旅」ナシード・ムアイヤド・アルアザム著、第1巻 P. 55-56

法律的な組織制度に関して言えば、イエメンにおけるトルコ統治時代には、行政上と司法上の2つのシステムがあり、それらはイマームの時代のそれよりも格段に優れていた。そして統治の末期の頃には、あらゆる諸州において、オスマーン帝国の影響下で様々な種類の裁判所がつくられ、それらはイスラーム法、商法、民法に関する国内法等を司る裁判所であり、更にこうした裁判所全てに対する控訴裁判所、最高裁判所、検察庁があった。

そしてその中心地であるサヌアーには検察長官がおり、その一部は司法研修所で訓練を受け、司法部門の上級職に進んだ者であり、彼等は裁判長官や検察長官になった者までいた。一方司法長官や大審院長官に関しては、司法界やイスラーム法曹界の大家で、アラビア語の能力に優れ、高貴さや徳を備えた人物の中から、オスマーン帝国が選出した。最も前述したトルコ統治時代の官吏の一部には、イエメンで賄賂を取ったりする者もいた。

イエメンにおける前述のトルコ統治時代に諸行政区や大きな都市に人民会議があって、それは行政委員会として知られていた。(注9)そしてそのメンバーは国民の代表や代理人達から構成されており、彼等が委員会を通して意見や要望を表明した。そして首都の行政委員会は、イエメン州の総委員会として知られていた。そして国民の代議員の1人が総督の代理となり、メンバーは30人であった。

(注9)：「略奪され苦悩したイエメン」著者不詳、 P. 1-3

その委員会は大きな力を享受し、まるでミニチュア版の議会の様であった。そして委員会は国民の祭典を伴いながら一定の帰還開かれた。開会式では総督がスピーチをした。それは丁度今日知られている様に、様々な国民議会で慣れ親しんでいるものと同様である。

但しこれまで述べてきた事には、次の事が除かれる。つまりイエメンの代議員が愛国心と平等を好み、トルコ大国民議会（トルコで言う代表者会議）において、イエメン国民を代表

し、彼等の国の公的利益の為に論争し、議論し、質問し、答弁するイエメン人の代表者がいた、と言うことである。

イマームの時代、人民の為に有効な役割、即ち彼等と指導者との架け橋の役割を遂行したが故にイマームの邪魔になり、首都やその他の諸都市にあった国民委員会は、既に消滅してしまっていた。そしてトルコによる第2回目のイエメン統治において、イエメンに居た総督達の殆どは、イエメンにおけるトルコ統治の手段として、抑圧と脅迫の方法を取っていた。

そして度々総督達は、特にサヌアーにおいて学者や商人達を捕え、彼等がイマームのマンスールやヤヒヤーに対して財政援助や寄付（ザカート）によって、2人を支援し彼等に忠誠を誓っているのだ、と言って告発し、追放した。否、そればかりでなく、トルコの総督達の何人かは、サヌアーでテロ行為を拡げ、警官が人々を公にしかも無差別に弾圧した。そしてとうとう多くの人々は自分達の店や家に錠を下し、家の中に閉じ籠る手段に訴えた。

尤もトルコ人の総督達の中にも少数ながら穏健で、公正で善政と叡智で知られた者達もいた。彼等はイエメンにおいて幾つかの改革の導入を試みていた。しかしながら本国のトルコ政府は、彼等改革者達が改革プランの実現に着手する前に、いち早くそう言う総督達を更迭してしまった。

改革の分野で成されたことには、次の様な事があった。工業や孤児や娘達を教育する5つ学校をサヌアーやアシール地方のアブハーに設立したこと。また軍事に関する予備教育の為に学校、そこを出るとイスタンブール大学の軍事学部に入る資格が与えられた。更に工業学校をホダイダに設立した。

旅行家のナジフ・ムアヤド・アルアズムが1927年にイエメンを訪れた時に、それらの建物が廃墟として残っているのを目撃している。それらは第一次世界大戦末期から起こったイマーム・ヤヒヤーとイドリース家との間の戦争直後に破壊され、イマームは自らの国が独立した時代においても、未だ再建しなかったのである。

道路の分野ではトルコは幾つかの山岳地に道を切り開いた。しかし諸事が安定しなかった事により、それらの内の一つも完全には成功出来なかった。同時に彼等はホダイダのラーズ・アルカシーブからバージル地方へ至る約50キロの鉄道の建設を始めた。最初の機関車がそこを通過したのは、公式の開通パーティの折であったが、そのパーティには、この開通を第2期オスマーン時代におけるイエメンの文化的生活の中で最初の重要な計画であると見做し、オスマーン帝国の総督、イエメン州の幹部達、そして領事部の職員達が出席したのであった。またオスマーン帝国総務庁はフランスの会社と計画の遂行を継続する為に合意をしていた。1911年にイゼット・パシャは作業の準備と線路が通る地域の木々を引き倒す事を命じた。

しかしながら西トリポリ（リビア）でのオスマーン帝国とイタリアの戦争は、1912年にイタリアの艦隊によるイエメンの海岸線への攻撃を導いてしまった。これはオスマーン帝国

の人々を西トリポリでのイタリアに対する抵抗行動から引き離す事を目的としていたものだったが、鉄道計画の諸設備は破壊されてしまい、運営局と専門家達は撤退してしまった。それからイマーム・ヤヒヤーは建設の終わっていた線路を無視し、人々は各々の私的目的に使う為にその枕木を引き抜いてしまった。

また軍事訓練に関しては、イスマール・ハッキー総督が、先に彼についての記述で触れた様に、イエメン人達から成る憲兵隊を設立し、彼等の訓練システムを作った。イエメン人達は憲兵隊の諸部隊において高度な技術を身に着けた。従って前述の総督は、トルコ人憲兵隊をイエメン人憲兵と交代させることを奨励した。しかしオスマーン帝国の宮廷はそれについての彼の上申に反対し、彼が作った憲兵大隊を廃止し、それを理由に彼をイエメン総督から罷免した。

それにもかかわらず、これはイエメンの組織だった軍隊を形成する核心となった。オスマーン軍にいた多くのイエメン人達がこの軍隊に参加した。特に1911年オスマーン帝国とイマーム・ヤヒヤーとの間で締結されたダッアーン協定として知られる和平協定後の彼等軍人達の参加は著しかった。イマーム・ヤヒヤーは前述のダッアーン協定調印以前と同様に、(軍への)参加に反対する様な事はしなかった。トルコ人達から独立後、イマームがこの組織だった軍隊で利益を得ることになるが、イエメン人達は多くの軍事事項を学んだ。

一般的にイエメン人達は少なくはあったが、様々なトルコの学校から利益を得た。多くの者が卒業したが、その中には統治権を伴った独立後のイマーム・ヤヒヤーの時代に、統治、行政、教育、軍事関係に携わった者が多くいる。

イマーム・ヤヒヤーは注意深くこの卵達の保護と成長を見つめることが出来、またオスマーン帝国の学校で学んだイエメン人の多くやその学校の人々と接触を持った人々から才能、能力、経験をより多く吸収する事が出来た。

だが、イマーム・ヤヒヤーの性質と彼が卒業した学校とその影響下で教育を受けてきた事(この学校は旧体制を維持していた)等に加えて、イマーム・ヤヒヤーを支援する人、保守急進派、彼の宣伝者、維持者であった者達の中には、彼のこの様な立場や性質をより激しいものにした側近達がいたのだが、彼等はイマームの脇に控えていたのであった。

これによりイマームは絶対的支配の手綱を握り締め、全支配権を彼の手に集めた。そして代表議会制や憲法統治を如何なる形態にせよ認めず、それどころか良く知られている意味においての委任権を伴った省庁を持った政府さえ構成しなかった。イマーム・ヤヒヤーの時代及び彼の後継者イマーム・アハマドの時代の詳細については、イマーム・アハマドの項で多く触れていきたい。「イエメン概説史」第5巻「イエメン現代史」P.41-55

(2015/10/12)